

# エッチュウバイの資源管理に関する研究

## (資源評価調査)

岡本 満・福井克也・沖野 晃

### 1. 目的

エッチュウバイ資源の持続的利用を図るため、ばいかご漁業の漁業実態を調査し、適正漁獲量、漁獲努力量等の提示ならびに漁業情報の提供を行う。これにより、本資源の維持・増大とばいかご漁業の経営安定化を図る。なお、ばいかご漁業全体の調査結果については、後述する「2023（令和5）年の漁況」に記載した。

### 2. 方法

#### (1) 漁業実態調査

島根県漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者が記入した操業野帳を解析し、本種の漁獲動向、資源状態、価格動向および漁場利用について検討を行った。

#### (2) 資源生態調査

漁業協同組合 J F しまね久手出張所および同仁摩出張所に水揚げされたエッチュウバイについて、各銘柄の殻高を測定し、銘柄別漁獲量から殻高組成を推定した。また、漁獲物を買取り銘柄別の雌雄組成について調査した。

### 3. 結果

#### (1) 漁業実態調査

2023（令和5）年のばいかご漁業におけるエッチュウバイの漁獲量は86.9トン（前年比117%）、水揚げ金額は5,820万円（前年比120%）であった。また、平年（過去10年）との比較では、漁獲量は130%、水揚げ金額は167%といずれも増加した。

平均価格は670円/kg（前年比128%）であり、1998（平成10）年以来24年ぶりに600円/kgを超えた前年を上回った。銘柄は特大、大、中大、中、小及び豆の6銘柄であり、特に小型銘柄は比較的高単価で取引される。小の平均単価は812円/kg、豆の平均単価は895円/kgであり、銘柄別単価が最も低い中大でも600円/kgを超えた。

利用した漁場は、江津沖から島根半島沖の水深190~210mの範囲に集中しており、2023年は操業日数が多かったこともあり、漁場が北東から南西に広がる傾向にあった。

#### (2) 資源生態調査

資源状態の指標となる1航海当たりの漁獲量（CPUE）は1,143kg（前年比140%）で、2021（令和3）年から3年連続で1,000kgを超えた。

1航海当たりの漁獲個数は約20千個（前年比120%）であった（図1）。近年は1航海当たりの漁獲量および同漁獲個数ともに増加傾向であり、資源は高水準にあると考えられる。

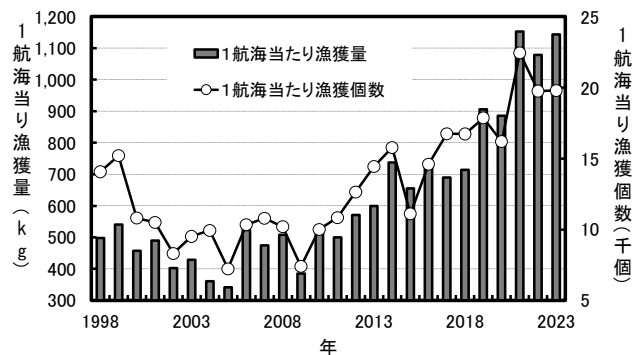


図1 1航海当たりの漁獲量および漁獲個数

漁獲物の殻高は37~132mmの範囲であった。2016（平成28）年以降40~80mmが平年に比べて増加傾向を示していた。しかし、2019年からは逆に低下傾向となり2023年も同様の傾向がみられた。小型群の減少は将来の資源低下に繋がるため、今後の資源動向については注意が必要である。

銘柄別の雌雄比については、最も小型の豆は雄がわずかに多かったが、大型になるほど雌の割合が高くなり、最も大型の特大では雌が9割近くを占めた。

### 4. 成果

調査で得られた結果は、島根県小型底曳網協議会ばいかご漁業者部会で報告した。調査結果は島根県石見海域におけるばいかご漁業の資源管理計画に基づく自主的管理措置である上限漁獲量の設定等の検討資料として用いられ、同海域のエッチュウバイ資源の持続的利用の推進に役立てられた。